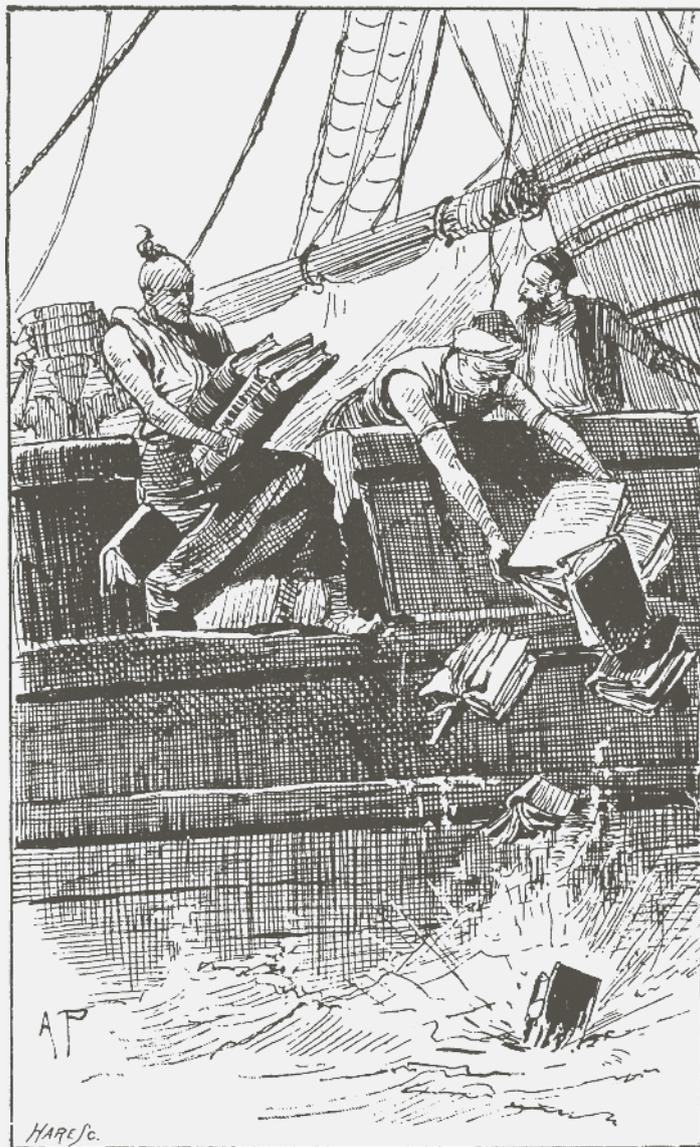


希望の灯 ひかり



本の破壊行為をしてかす、
数多の敵がいる。
敵はたやすくその目的をやりとげる。
非常に哀れむべきことだ。

ウィリアム・ブレイズ著
『ザ・エネミーズ・オブ・ブックス』
ロンドン：エリオットストック社、1888年刊
インターネットアーカイブ収蔵
URL: <http://openlibrary.org/>

目次

| | |
|--------------------------|----|
| 電子出版はみんなのもの | 2 |
| 本でつながる絆を求めても、求めなくてもいい未来 | 6 |
| 紙の危機と電子本の役割 | 8 |
| ドットブックとEPUB 3——組版とWebの調和 | 12 |
| ありものの輝き——古くて新しい表現 | 18 |
| eBookデザインへの第一歩 | 20 |

電子出版はみんなのもの

株式会社ポイジャー 代表取締役 萩野正昭

電子出版——海外事情を話すときはあえて eBook としておきます。米国での eBook の普及は着実に実績を伸ばしています。タブレットでの eBook の読者人口は、2011 年末の 20% から数ヶ月の間に 25% に上昇しました (BISG 調べ)。多くの人々が読書のために eBook を利用するだろうことは明らかになってきたのです。出版のデジタル化はかなり進んできており、100 万単位の eBook の存在があるのです。

日本はまだまだそこまで到達できていません。けれど、官民一体になってこうした書籍の電子化を推進する動きがでてきています。早晚、日本においても米国とおなじ様相を示すだろうことは予測できることです。先頃発足した出版デジタル機構は、電子的出版点数を上げていくという第一段階のとりくみを明確にうちだしています。日本でも、電子出版に誰もが親しむ世界がやってくるのはもうすぐです。

◆何のためなのか、誰のためなのか

普及浸透するなら電子出版はみんなのもの、そう考える時代が来るだろうと誰もがおもいます。何度も叫ばれてきたことですが電子出版の製造コストはきわめて低廉です。返品もありません。なによりも、生産から販売まで手段と仕組みを一人の人間に与えてくれているのです。手段をもたない未来の作家であり読者である人たちへ、新しい世界が開かれていくはずのものなのに、いかに電子出版はみんなのものになっていないか、そこを考えてみる必要があります。

誰にとっても電子出版をどう作るのかが最初の大きな課題でした。エキスパンドブック (Expanded Book) というのが私たちポイジャーが最初に取り組んだ電子出版の製作ツールです。作ることが世界を広げる意味をもっていたのです。

同じようなことを誰もが考えました。時代はコンピュータの激しく進化する渦中でした。次々に新しいパワーが加わり、機能が強化されていき、必死に時代を先駆け、機能の優劣を競い合ったのです。いつてみれば、本を手本にした、あの手この手の機能を競い合う競争だったといえるでしょう。独自の方法で他を圧倒する思想がそこには横たわっていました。抜きん出ることによって市場を制覇し、少しでも多くの普及を掌中にして意のままに支配しようという考えです。フォーマット争いの原型がここにあったわけです。

製作手段と閲覧端末=デバイスは関係性を深くもっています。デバイスを供給するのはメーカーです。メーカーはデバイスの高性能、低価格化に精を出すわけですから、コンテンツの供給にまで手が回りません。だから都合のいい相手と提携しようとしています。コンテンツ、デバイス、書店の三者が連携してグループを組むことにもなります。中味をどう作るからはじまった競争は、それを何で読むか、どう流通させるか、デバイスメーカー、書店をも加わった形で拡大していきます。

およそ 20 年、こうした流れのなかに電子出版はあったのです。

日本国内では米国の先行する eBook の“開拓者”へ対抗する状況が生まれました。市場を牛耳られたらどうするのか？ 国内市場での成長の果実をことごとく外国勢力に吸い上げられてしまう、これでいいのか。彼らへの強力な対抗策として手を組み連携するしかない。一理ある考えだったとおもいます。けれど、それは何のためなのか、誰のためなのか、電子出版はみんなのものだという考えとどこで調和できる考えなのだろうか。自分が救われることだけを言ってやしないか、という疑問が次々と浮かんできました。

◆可能性よりもあたり前を！ 表現よりも記録を！

デジタルは私たちが高揚させました。輝く画面、色彩、素早い反応、ここに幾多の可能性を誰もが感じたことでしょう。可能性の一つのジャンルに電子出版もあったわけです。

ところが電子出版の現実には安易な希望を打ち砕きます。まず、本であれば誰もが手に取ることができるのに、この世界はコンピュータの仕組みに基づいていました。しきたりが違えば、あっちでは読めるが、こっちでは読めない。作品を読むための読書ソフト=リーダーが壁を作りました。これを読むためにはこっちのリーダーがなくてははいけない。あっちのリーダーで読むためには、あっちの決まりで一定したデータを仕上げておかねばならない、一定とは汎用ではなく排他であったわけです。様々な窮屈な現実が露呈していったのです。

希望を語れば語るほど、実現に努めれば努めるほど、作品の永続性は保証されず、技術の進歩という変化に、早々この世から消える運命となっていきました。必死に作ったものが残らないという現実です。作るということ、本であれば書き残すという言葉がしっくりするでしょう。書くとは並大抵のことではありません。人の命を削る行為に等しいとさえおもわれます。それが残らないのです。

出版とはそういうものではありません。紙の本という伝統的なメディアが示してきたことは、字を読むことができるなら誰もが読め、そしていつまでも残るということでした。本とは何かと定義するなら、けっして欠かすことのできない本質として、この二つの要素は明記されるはずですが。残念なことに、電子出版にはそれがなかった。

既存の出版社は、ほくそ笑んだとおもいます。ちゃちな電子出版が出回ったところで、本物の作家は動揺などしないだろう、上辺の利便性はデジタルにやらせるとしても、紙を基盤に置かずして出版の本質は成り立つはずもない、と。そして、紙本位に出版の電子化は推進されていきました。

人類の遺産だともいえる書き残された書籍がことごとく電子化され、それを瞬時に読むことができることは、何よりも真っ先になされてしかるべきことでしょう。当然のこととして電子化の明快な課題です。このためにみんなが力を合わさずに角逐し合っただけで済むのでしよう。でも現実には、そこに市場を狙うビジネスマンが闊歩したのです。「ワイルド・ウェストといわんばかりの無法領域だ」と、セブン・ストーリーズプレスの発行人ダン・サイモンは『アメリカン・エディターズ』(<http://tt2.me/13261>)の中で語っています。反省の中に改

めて自分たちの進むべき道をみいだそうではないかと考えます。どうしたら、“みんな”が手段を得ることが出来るようになるのだろうか？

不可能だったことに挑戦する気持ちは十分すぎるぐらいわかります。それが創造でもあるからです。しかし誰にもできないことへの挑戦は一方で、誰もができることへの挑戦と考えることができます。出版が極めて平易なメディアであることはみんな承知していることです。けれどこれを利用して誰もが出版できることを促進しているのかといえば、決してそうではないです。

手段はシンプルであるべきです。誰もがそれを使えるものだからです。可能性の追求に走るより、当たり前の実現を確保するべきです。そして後世に残したいわけです。シンプルということは、表現に自ずと限界をもたざるをえません。このまだるっこさを如何ともしがたいのは私とおなじ気持ちです。けれども、デジタルにある可能性が自由な表現であったとして、それが複雑なものであり、技術の最新性に依拠していたら、永続性は保証されない、進歩と変化に左右される、残らない、この現実はずでにお伝えしてきたとおりです。表現よりも記録を重んじる。記録することを誰もが試みられる当たり前の手段が備わり、誰の目にも届くこと、後世へ残されること、これを確実な基盤の上に築いていく必要があります。電子出版は決してコンピュータやネットワーク時代の前衛ではなく、社会に浸透する技術の理解の上に成り立っている「しんがり」の世界なのだと思ふべきです。

当面やるべき3点の最重要課題が電子出版にはあるとおもいます。

1. 閲覧の保証： コンテンツはどんなデバイスでも閲覧可能であること
2. フォーマットの統一： 共通フォーマットで成り立つ世界であること
3. 検閲の排除： 書きたい本、読みたい本、これは自由であること



新しい作家のチャレンジが活発になっている。電子出版の書店がこうした試みを支援し、大きな成功例ももってきている。新作が並んだインディーズのコーナー。Book Expo Americaの会場にて。

❖出版者として自由でいたい

私たちが選んだ道は、“Books in Browsers”といわれる、Webブラウザで本を読む方法でした。このやり方を短く“BinB（ビー インビー）”として、コンセプトをまとめ上げていきました。現在すでに、

閲覧が開始されています（<http://binb-store.com/>）。

なぜそうするのでしょう？ 閲覧の保証とはごく当たり前の原則です。紙の本をどこかの書店で購入して、読むに際して何か条件をつけられることはありません。読みたい本は、読者が自由に読めなければならない。

電子出版の現状をみると、作品はどの書店で購入したかによって閲覧するリーダーが異なっています。書店やデバイスに紐づけられて、それぞれのリーダーを読者は備えなければなりません。電子出版にはいくつものフォーマットがあり、フォーマットごとに排他性を持っている以上、コンテンツの供給側はひとつの作品をそれぞれのフォーマットに仕上げておかねばならないのです。

書店側は、販売する以上、売れるコンテンツが欲しいことから、複数のフォーマットを閲覧できる異なったリーダーを包含した形で独自に準備したのです。こうした現実によって、出版された作品の閲覧方法がいくつも出てきました。読者にとっては混乱の極みです。書店は売上を競い、市場を自分が支配する戦いを展開しました。読者はまるで関係なく、この世界の秩序は誰か市場を支配するかで決まるように語られてきたのです。

しかし、ある書店やデバイスが強力になればなるほど、支配力を持った配信側が、自分の考えや都合を押し付けてきます。アップルが配信をおこなう書店では、スティーブ・ジョブズについて書かれた本に口出しして、ある作品の販売を排除したのです。表現のあり方についても、配信側が独自に判断するような一種の「検閲」も行われるようになりました。

私たちは出版者として自由でいたいと切に願います。私たちの電子出版は、アップルの審査を通すプロセスなく読者のiPhone/iPadで閲覧できるべきだと考えます。どんなデバイスでも読者は本を読むことができる……この道筋を遮ることに対して、私たちは向かいあうべきです。出版の自由に関わることだからです。

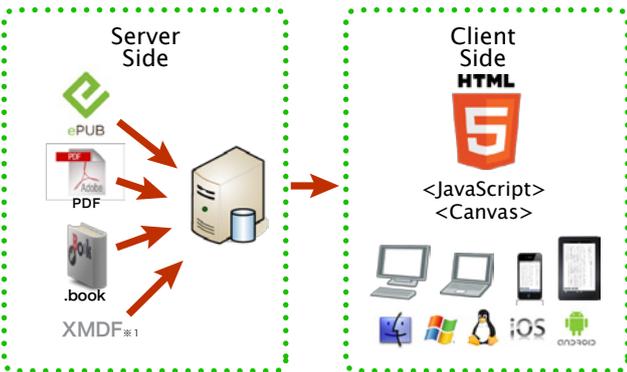
“BinB”の考えには、錯綜する読書アプリケーションの開発はもうこりこりだという私たちの本音が背景にあります。デバイスは次々に世の中に出てきます。そして、忘れてはならないことは、次々に消えていくのです。消えなければ絶えずバージョンアップをくり返します。デバイスごとの読書アプリケーションは単なる一時的なものとならざるを得ない現実にはハッキリしているのです。

WebブラウザのHTML5がもつWeb標準技術に立脚することによって、いくつかは解決の糸口が見いだされるでしょう。CSSやJavaScript、CanvasといったWeb技術は標準化という国際的な話し合いの中で取り決められていますから、時間はかかるとはいってものみんなを代表する方向性が貫かれています。

“BinB”では、出版される本はネット上の書店にあるというよりは、ネットそのものが書店だという観点に立っています。ストアなきストアです。本そのものがネット上にあり、本そのものに購入ボタンがある、それで終わりでいいじゃないか！ ネットの時代にわざわざ書店にたどり着き、店に入って本を買うことしかできないスタイルは徐々に変化していくのだと私たちはおもっています。

BinD 特長：マルチフォーマット

EPUB 3 / ドットブック (.book) / PDF などさまざまなフォーマットに対応



※1：XMDFは、総務省が呼びかけ日本電子書籍出版社協会が主催した「電子書籍交換フォーマット標準化プロジェクト」の成果を利用。

❖世界の共通性と互換性

希望として、電子出版の基準フォーマットを世界の共通のものにしようという動きがあることです。IDPF (International Digital Publishing Forum= 国際電子出版フォーラム) は、EPUB という電子出版の世界標準を考えてきました。ここで示される基準/ルールに従って電子出版のデータを製作することは、世界の共通性の上に立つことです。世界には多くの言語があって、元々共通性ではなく独自性じゃないのか、と言うかも知れません。しかし、これを前提にしてなお、共通性を求めることの重要性は、すでに WWW に象徴されるインターネット Web の世界で私たちは実感してきました。世界のどこにいても、私たちは世界の共通基準に基づく Web ブラウザを介して瞬時に情報へアクセスできるようになりました。各国言語の独自性は、自動翻訳の進歩によってゆっくり着実に溝を埋める方向に向かっているとおもいます。相互のコミュニケーションを可能にするために世界の共通性の上に立つことは、私たちに計り知れない多大な恩恵を与えています。

自分たちのつくってきたフォーマットを、その垣根を取り払い、排他性を越えて、世界の共通性へ融合させていくべきです。日本語が独特の表示の特徴をもっているなら、その独自性と世界の共通性との架け橋を築くべきでしょう。日本語の電子的表現に関する幾多の知識と経験を持つ者こそ、この任務に適した立場であるはずです。排他的自己主張から、“みんな”のために自分を役立てる道を選択する決断の時がやってきたのです。“みんな”には先行する巨大な米国の“開拓者”も、既成の利権を守ろうとする者も含まれるでしょうが、しかし、同時に名もなき未来の開発者、作者、読者、庶民をも含む全て、みんなのものとして与えられる社会資本の意味合いを持っていることを忘れるべきではありません。

IDPF に参集する世界の企業、組織/団体が、粘り強い協議を経て、世界の共通性と互換性について、既存勢力、新興勢力の隔てなく、誰もが出版に参加できる手段の提供という困難な課題に取り組んできました。そこに共通のフォーマットを導き、EPUB 3 として世界に問うているのです。IDPF はまた、電子出版活動に参加する人々のために、制作基盤となる手段について参考事例を提示しようとしています。

Readium プロジェクト (<http://readium.org/> : Readium については p14 を参照) はこの具体的事例といえるでしょう。

❖独占したい心で本を尊重できるのか？

本とは何だろう？ ふとそういうことを考えてしまいます。本という捉えどころのなさがいくつも見えてくるからです。紙であろうと電子であろうと、本は自ら読まない限り一切何も与えてはくれません。読んだからといって充たされるものだとはいい切れない、そんな馬鹿なっ！とおもわれるかもしれません。

「時間がないからといって誰かに代わって読書してもらおうというわけにもいかない。べつの仕事をしながら、車を運転しながら、TV をみながら、読むということもできない。居眠りしてはっと目ざめて、気がいたら読み終わっていたということもない。こっちがちゃんと付きあわないとどうにもならない代物」と長田弘は『本という不思議』の中で述べています。

世の中には便利なものが次々と生まれています。電子出版も便利なものを代表する商品として紹介されました。しかし、同時に本であるという厳然とした一面を持たざるを得なかったわけです。便利が氾濫する世の中、何でもしてくれるサービス、それに人はお金を払う、だけど自分で自分にサービスしなければならぬものにお金を払う本……電子出版の表面的な利便性を一通りすぎて、人はようやく本としての電子出版に向き合わなければならなくなりました。

何でも与えられる世界を少し離れて、本に向き合い自分の力で紐解くことをおもしろく感じてみてください。読むという問いかけをすれば、時に恐ろしいまでの反応をしてくる世界を蓄えている、それが本であることも事実でしょう。本は、記述され、残され、ある日どこかで誰かの問いかけを待っているのです。それが本の存在というものです。小さく、^{つま}儉しく、静かなる、シンプルなもの。これに情熱と心血を注ぎ、いつまでも待ちつづけるという最も堅固な不屈なメディア、それが本ではないのかとおもいます。

私たちは明らかに本の何たるかを忘れかけています。本の輝かしい歴史を通して、ただそこにある美談だけを感じ取るのでは十分ではありません。世紀末から新世紀へのこの間に展開された狂おしい変化の実態から、本が進む道の険しさを察知してきたのではないのでしょうか。そこに、本が墮落していく姿も、売上の確保に苦闘し狼狽する有様も見えてきたではありませんか。足元にも及ばない新参者の電子出版が、それでも本に向かって訴えかけたこと、それは本に対する警鐘につながるものであったはず。本質へもどる何かの手がかりとして、新しい技術と思想を利用せよと私たちボイジャーは一貫して訴えてきました。

❖苦しい、だから発信する

売れるということは、そんなに決定的に全てを規定してしまうのでしょうか？ 受け入れられるのか、受け入れられないのかは、簡単に

は決まるものではありません。いま売れなくても、何かの拍子に売れるに転化することもあります。見識がすぐには評価されなかったとしても、どこかで注目されるようになることもあるでしょう。力量という枠を超えているのです。プロフェッショナルだからといって成せることではないし、見透すなどそもそも誰もできないことです。

作品を送り出す土壌がそこにあることこそが全ての基盤です。必死になり自分を賭して作品を残すメディアを保持している……その大切さこそ尊重されるべきです。これは出版というメディアのかけがえのない利点であり、チャンスなのです。専門化、画一化を乗り越え、チャンスに賭けることができる経済性と、誰にでも与えられる手段が備わることができれば、そこに広大な視野が開けてくることでしょう。人の記録という仕事の重要さが見えてきます。記録を活性化させる手段として、電子出版は多くの可能性をもっています。

みんな苦しい、だから発信するのです。あなたの苦悩をここに記すのは明らかな理由があつてのことです。喜びを伝えるよりも悲しみを伝えることの方が何倍もの発信の欲求を掻き立てるのは、訴えるべきことわり理ことわりがそこに潜んでいるからでしょう。諦めや嘆きを無邪気に吐露とろすることをしばし止めて、冷静に事実を、ご自身を、見つめてください。そして書いてください。生きていくための米や麦と同じ糧にひとしい価値がそこにあるだろうと私は信じたい。

おそらくどこかで、いつの日かあなたの発信に呼応する声が上がります。孤独で無援な声の存在こそ、時代の証言にはかならないのです。どのメディアがこれに手を差し伸べることができるのでしょうか、出版を除いて、そんなメディアがあると私は言うことができません。何を悠長なこと言っているのか！と非難したり、卑下したりするのなら、本の世界などに近づくべきではないでしょう。華やいた何か別の世界があるはずです。

“みんな”に代表される実像は、読者であり、読者の究極だろう未知の作者だとも思います。読者と作者の中間に位置して、市場を席卷しようとするビジネスを論議することだけが電子出版を語ることはありません。それは一部のことです。

長いこと人々は電子出版を疑ってきました。当然だったとも思います。電子出版が何であるかを把握するには、とても複雑で理解がたい障害がそそり立っていたことは事実です。それが障害であるという認識すらもなかったのです。五里霧中のなかにあつて、そこで生きていかなければならぬし、なにがしの対価も得ていかなければならなかったのです。

電子出版は“みんな”のもの、そして、“みんな”でつくるもの……手段をもたない未知の作者／無名の読者へ呼びかけようこの言葉がたどった道の険しさを思い返します。一つの歴史だといついでいでしょう。けれど、たかが20年ではありませんか。ここで起こったことを一部始終、私たちは目撃してきたのです。もう一度振り返り、反省することができるチャンスを明らかにつかんでいるのも事実ではないでしょうか。

出版という手段をもつことはメディアの創造であり、未来の作者であり読者であろう人にとって、自分たちの開拓地を手にするこ

ります。電子出版は、田畑を取り上げられたもたざる者に、土壌と鋤くわを与えようとしたのです。メディアの“農地解放”です。お金が降ってくるような、すがってみたい言葉です。けれど、解放を与えてくれる援軍をただ待つ無為な日々をおくるわけにはいかないでしょう。電子出版は“みんな”のもの、そして、“みんな”でつくるものです。一人でもそこに立ち、一人でもみんなを探し歩いていくことから始めねばなりません。



電子出版が世の中に定着していくに従って、多くのインディーズ作家が出現している。作家のebookや簡易プリントの本を見本市では盛んに宣伝している。うず高く積まれた本を、老人は凝視している。

於：2012年6月 Book Expo America にて

本でつながる絆を求めても、 求めなくてもいい未来

文芸エージェント 大原ケイ

「晴耕雨読」という言葉は嫌いではない。自然と共存しながら本を読むという孤高の営みをスティックに享受する人の気持ちが端的に言い表されている素敵な表現だと感じるから。

しかしこれを Till when it shines, read when it rains. などと英語に言い直したところで、私の周りの本好きなニューヨーカーたちにはその心意気というべきものはなかなか通じないかもしれない。「本なんて読みたいときに読めばいいんじゃない？ なんでお天気に左右されなければいけないの？」と一蹴されそう。

どうやら日本では電子書籍というものの「到来」で出版業界が上を下への大騒ぎをしているようだ。もう何年も。騒ぐわりには身近なものになっているとは言い難いが。ブックフェアの度に eBook のことばかり訊かれて、アメリカの出版関係者たちも当惑していることだろう。「順調に伸びていますよ」としか答えようがないからだ。2011年には5人に一人が電子書籍の端末を持つまでに至り、今では3冊に1冊が電子書籍で売れ、将来的にはそれが50%に達するだろうというのが、大まかな予測だ。

ニューヨークの地下鉄やバスに揺られていると、アメリカでは既に当たり前のように eBook が読まれていることを実感する。同じ英語圏であるイギリス、カナダがこの後に続いている。だが eBook が「ブーム」になっているわけではない。誰もが右にならって「人気アイテムだから」と Kindle Fire を手に持って読書に勤しんでいると思ったら大間違いで、古い型の NOOK に人気ファッションデザイナー、ケイト・スペードのカバーを付けたおしゃれな女性もいるし、相変わらずポロポロになったペーパーバックを読みふける男性もいる。郊外の住宅地からの通勤電車では iPad がそこかしこで作動中だし、相変わらず大判のニューヨーク・タイムズを広げている御仁もいる。

地下鉄を降りて地上に出れば、昔ながらの小さな本屋もまだ残っているし、もう何十年も同じ路上に古本を並べて商いをしている人もいる。同じタイトルでも、アマゾンでポチッと買ってしまえば真っさらな新刊書をもっと安く買えるけれど、それでもやっぱり本屋をそぞろ歩いて、書店員と言葉を交わし、うきうきしながら帰り道を急ぐ習慣がなくなる日が来るとは思えない。

なぜそうならないと断言できるのか？ それは本が好きな人たちは、本について誰かと語り合いたいという気持ちと、本によって著者や他の読者とつながりたいという気持ちがあるからだろう。アメリカ人は特にそう。誰だって自分も本を書いてみたいと思っているし、一方的に本に書かれていることを読んで、ハイそうですか、わかりました、というのは彼らにとっては理想の読書ではないのかもしれない。

◆本を読んだ体験をシェアする

紙の本では実現できなくて、電子書籍なら可能になる特徴の一つとして「ソーシャル機能」がよくあげられる。自分がこの本を読んだという体験を他の人とシェアできる楽しさが売り込み文句だ。でもアメリカ人は eBook などというものが無い時代からずっと、本を読んでは他の人とシェアするのが好きだった。ブッククラブという形で。

「ブッククラブ」という言葉が指すものには2つあり、一つは会員制通販カタログサービスビジネスとしてのブック「セールス」クラブ。古いところでは「ブック・オブ・ザ・マンズ・クラブ」は1920年代からあり、一時期その会員は数百万人にも上った。

パソコンを使ってオンライン書店から本を買う、ということがまだ一般的でなかった時代から、ブッククラブは「寝ても覚めても読書三昧」という本の虫（英語では文字通り bookworm だ）のために用意された仕組みだった。

一定の期間に最低何冊、というコミットメントがあらかじめ決められ、毎月、郵送されてくるカタログをながめ、興味ひかれるタイトルを探し、電話や往復書簡で注文を入れて、本が届くの待つ。これなら「晴耕雨読」スタイルで本と向き合うことができる。ブッククラブが盛んだった時代は、これが全国組織になり、カタログは刊行される本にはすべて目を通してはいないかという網羅の仕方、ブッククラブの選定員は、どんな有名誌の書評家にも劣らない慧眼を持っていた。ブッククラブが印刷所を所有し、出版社から許可を得てメンバー用に独自に本の廉価版を刷るほどだったのである。

（稀少本の収集家にとっては、劣化版と思われていたブッククラブの製本がトリックとして日本でも本好きの人に人気のあるジョン・ダニングのスリラー『死の蔵書』に登場する。亡くなった老人が自宅に残した本が、ブッククラブ版ではなく、彼がわざわざ買い求めた貴重な初版だというのがトリック。）

そしてもう一つの「ブッククラブ」とは、至るところで少人数が自発的に集まるグループを指す場合のブック「ディスカッション」クラブだ。図書館で、地元の本屋で、あるいは個人宅に集まり、同じ本を読んだ上で、その体験をシェアする。感想を述べ合う、というのは正しくないかもしれない。そこはディベート大好きなアメリカ人のこと。端から順に「面白かったです」「勉強になりました」と発表するには終わらない。自分の考えをぶつけ合い、反対意見を聞き、掘り下げていくことで、孤独な作業だった読書に肉付けされていく。

何しろこちらの学校では、先生の話や大人しく聞いて、テストで高得点をとるだけではない成績はとれないぐらいだ。それだけではクラスに「contribute（貢献）」していないからダメです、と言われてしまう。先生に質問をして、クラスメイトの前で自分の意見を述べ、自分が何を学んだのかを明確にする、という作業を指して授業という。最近日本で人気沸騰のサンデル先生とのやりとりを観てもそれは明らかだ。一方通行の講義では味わえない、学ぶ楽しさがそこにあることに気づいた人も多いのではないだろうか。

少人数でローカルな場所に点在していたブッククラブの楽しさを、全国規模の一大イベントにしたのがステイブ・スビルバーグ監督

映画「カラー・パープル」や自らプロデューサーも務めた映画「愛されし者／ピラヴド」の女優であり、主婦層を中心とした人気テレビ番組のホストを務めるオプラ・ウィンフリーだった。アメリカでその名を知らない者はなく、エンタメ界長者番付でも常に上位の彼女が番組で「ブッククラブ」を呼びかけたのは、1996年。無名の作家の処女作で次男を誘拐された家族の崩壊と和解を描いた『青く深く沈んで』が瞬く間に大ヒットとなった。

読書好きの彼女が番組の収録の合間に読んだ本の中からお気に入りを選んで、課題図書として発表する。「この本、すごく面白いわよ。みんなで読んで語り合いましょう。」全国の視聴者が一斉に同じ本を買求めたことから、初期の課題本はすぐに店頭から消えてしまうという事態が起こった。何しろ「オプラのブッククラブ」の推薦図書に選ばれば、間違いなくベストセラーになる影響力だ。出版社にしてみればジャンボ宝くじが当たるようなものである。版元はこぞってオプラの元に段ボール単位で本を送り始めたのは言うまでもない。

読みたい人が大勢いるのに本がない、という事態を回避するためにオプラは、ブッククラブ発表の度に、内密に選んだ本の版元に事前に連絡するという措置をとるようになった。秘密にされれば知りたくなるのが人情である。毎回、オプラから本の注文が入る時期になると、印刷会社へ大量注文が入った本のページ数と版元から、彼女のお気に入りへ選ばれた作品は何かを当てる業界のお遊びが流行ったぐらいだ。

地元の小さなカフェで開かれるブッククラブと違うのは、全国放送のテレビ番組を通して、オプラが一言声をかければトニ・モリソンのようなノーベル文学賞作家や、コーマック・マッカーシーのようにめったに人前に出て来ないことで知られる寡黙な作家も、喜んでスタジオでの収録に駆けつけるところだ。事前に応募した視聴者の中から、同じスタジオでモリソンと食事をともにしながら、彼女の本について直接質問をしたり、感想を伝えたりできる。あのマッカーシーがテレビで自作について語っている。テレビ業界にとっても、「本を取り上げることで視聴率が取れる」ことを知らしめた。

これを喜ばない読者や著者がいるだろうか。おっと、一人だけいた。『コレクションズ』が課題図書に選ばれたにもかかわらず、番組への出演を断ったジョナサン・フランゼンだ。アメリカ現代文学を担う新進作家と目されるフランゼンだが、オプラとの対立や、eBookを本とは認めない、と発言するなど、一人でしばらく怪気炎を吐いていたが、その後オプラとも仲直り宣言をし、彼の著作ももちろんeBookで読める。

オプラ・ウィンフリーが自分のケーブル局をスタートさせるのをきっかけに、彼女のブッククラブは2010年、いちおう区切りを付けた形になったが、最近、そのケーブル局OWNで「ブッククラブ2.0」と名付けられたコーナーが再開される運びとなった。課題図書はもちろん紙でも買えるが、eBook版では、オプラ自身が書き込んだメモや下線部分が表示できるようになる。

テレビ画面のピクセルとして、広がった「みんなで本を読む運動」は、オプラの番組だけに留まらず、他のテレビ番組や自治体にまで広がっていった。シカゴやシアトルなど、都市を挙げて課題図書を決めて取

り組んでいるところもある。

そう、ソーシャル・リーディングとはアメリカ流の「みんなでワイガヤ」読書に他ならない。晴耕雨読とは逆を行く騒々しいお楽しみなのかもしれない。ポテトチップとビールしか出ないホームパーティーで盛り上げられるのも、街中で突然みんなで踊り出すのも、得意な人たちだから、読書も同じように楽しまなくてはソンドと思っている。

書籍そのもののデジタル化によって、このワイガヤ感が等しく誰にも楽しめるようになっていく。既にKindleやKoboの端末では、他の人が文中のどこに下線を引いたかがわかるようになっていく。読後感想を書き込めるプラットフォームはネット上にいくらかもある。Facebookには読んだ本をシェアする機能もついた。著者を引っ張り出してチャットやインタビューが楽しめるマーケティングを準備する版元も増えてきた。

◆紙の束縛からの解放

本がデジタル化されるということは、紙という長年の束縛から本が解放されることなのかもしれない。それまで出版社から一方的に「あなたはこの装丁で、この文字の大きさで、この本屋で読者を待つんですよ」と言われ、大人しく従っていた本たちが、デジタルなデータになったことで、これからは瞬時に、国境さえも超え、自由にそれを求める読者の元へ飛んでいける羽をもったことに他ならない。

これによって読者もまた解放される。読みたいときに読みたいコンテンツを手に入れ、自分が読みやすい大きさの文字に表示して読む。あるいは読み上げ機能が付くことによって目が不自由な人でも、手作業をしている時も読書ができるようになる。わざわざ辞書を引かなくても、わからない単語の意味を調べることができる。いくら読んでも、買い貯めた本の重みで床が抜けることもないし、いつでもどこでもクラウドで持ち運びができて、好きなデバイスで読める。

著者もまた自由になる。伝えたいことがあったら、それを余すところなく伝えればいい。原稿用紙で何枚、という分量制限がなくなる。コストを気にして割愛する必要もない。それどころか出版社でさえも要らない。

アメリカですんなりeBookが受け入れられてきたことに理由があるとすれば、それは、文化だの、再販制度だの、社会のお約束だの、出版社の決まり事だの、世間の常識や空気だのを意に介さず、純粋に「もっと楽しいことないかな」と貪欲に読書をエンジョイする気持ちに後押しされた環境も見逃せない。

そしてもちろん、どんな時代になろうとも雨の日に一人、なにごとにも邪魔されず、孤独に紙の本を読みたいのであれば、そうすればいい。



大原ケイ

日米双方の出版社に務めた後、日本の著書を海外の出版社に売り込むエージェンツとして独立、東京とニューヨークを往復する。著作に『ルポ 電子書籍 大国アメリカ』（アスキー新書、2010）、ブログは「本とマンハッタン」（<http://oharakay.com/>）

紙の危機と電子本の役割

編集者・評論家 津野海太郎

コンピュータ文化の歴史（電子本や電子出版をふくむ）がはじまったのが20世紀中葉——。

では、なぜこの時期だったのか。一つには、これまで人類の知の集積をささえてきた「紙=本」という伝統的基盤に対する不安が、この時期にじわじわと深まっていたからです。この不安にはおそらく以下の二つの面があったにちがいない。

①紙の能力にかかわる不安——20世紀にはいって急増した情報を、はたして「紙」だけでうまく処理してゆけるだろうか？

②紙という資源にかかわる不安——紙はいつまで安定的に供給されるのだろうか、もしかしたら意外に速く枯渇してしまうのではないだろうか？

このうちの②の紙資源に対する不安については、以下に再録するエッセイ「紙が消えたらどうしよう」（『図書』1998年6月号、のち『読書欲・編集欲』に収録）の中で、じぶんの体験とからめて、ざっと述べたつもりです。

しかしそこでは、①の紙の能力への不安についてはまったく触れていない。そこでこの機会に、そちらの側の不安について、いそいで述べておくことにしました。

紙の能力への不安という、私がまさきき思い浮かべるのは、かつてヴァネヴァー・ブッシュが提唱した「メメックス」のことです。

ヴァネヴァー・ブッシュというのは、ときに「マルチメディアの父」とか「巨人」と呼ばれる伝説的な科学技術者ですね。そして、かれが1940年代はじめに構想した情報処理（記憶と思考）のための画期的な道具イメージ、それが「メメックス」——。

むかしとちがって、なぜか、いまは「メメックス」に言及する人はあまりいない。そこで念のために、その簡単な説明を、歌田明弘氏が1996年にだした『マルチメディアの巨人 ヴァネヴァー・ブッシュ——原爆・コンピュータ・UFO』という長いタイトルの本（力作です）から引いておくことにします。

「……その機械は、一種のマイクロフィルム検索装置だった。装置全体は机の形になっていて、資料を読みやすいように上部が斜めに傾き、半透明のスクリーンになっている。メメックスについている装置で資料をマイクロフィルムに映しとるか、購入し、保存スペースに収めて、スクリーンに映し出して利用する。再生するだけでなく、自分のコメントを書きこむこともできる。資料はマイクロフィルムに縮小されているので、保存スペースがいっぱいになることはない」

しかも、テキストをはじめから一直線に読みすすむだけでなく、強

力な検索機能を駆使して、たてよこ斜め、複数のテキスト群を自由に組み合わせることもできる。ヴィジュアル資料も音声もテキストも同様に扱えるし、電話線をとおして図書館の文献をさがし、自宅のメメックスに取りこむこともできる。

これだけ読めばすぐわかるように、ようするにブッシュがイメージした「メメックス」というのは、いまあるデスクトップ型パソコンとおなじものだったんです。逆にいえば、70年以上もまえのアナログ科学の時代に生まれた「メメックス」という夢の装置が、デジタル科学の現代では、パソコン+マルチメディア+インターネットのシステムとして、完全に、いやそれ以上のものとして実現されてしまっている。

そこから思うことはいろいろありますが、いまここで私が強調しておきたいのは、このときブッシュの胸中には、もしも人間のつくりだす情報がこのまま増えつづけていけば、遠からず紙メディアだけでは処理しきれなくなってしまうかもしれない、という暗い予測があったということです。

いや、かもしれないのではなく、すでにそうなっているとブッシュはいいます。その証拠に、メンデルの「遺伝の法則」は、おびただしい論文の山に埋れて、一世代ものあいだ気づかれず眠ったままになっていたではないか。ことほどさように、

「死蔵されている科学の情報はあまりにも多い。膨大な量の研究が発表され、どの研究者も自分の領域の発展を追うのがやっつとで、関連領域の研究を知ることもむずかしい。「メンデルと同じ悲劇が繰り返されているにちがいない」という思いが、ブッシュを、マイクロフィルムの検索装置やメメックスの考案に駆り立てた」（歌田『マルチメディアの巨人』）

そして、この「メメックス」イメージに刺戟^{しげき}をうけた次世代のJ・C・R・リックライダー、ダグ・エンゲルバート、テッド・ネルソン、アラン・ケイといった秀才科学者たちが、それをモデルに現実のコンピュータをつくりあげ、小型化し、それがビル・ゲイツやスティーブ・ジョブズの手で商品化されて現在にいたる。

そして、いま私たちが電子本や電子出版と呼んでいる動きが生まれてきたのも、じつは、この過程に並行してのことだった。

ざっといえば、1970年前後、アラン・ケイの段階で「ゲーテンベルク・プロジェクト」（青空文庫のお手本となった電子公共図書館）が始動した。そして80年代から90年代はじめ、スティーブ・ジョブズの段階（アップル前期、ハイパーカードの時代）で、アメリカと日本のボイジャー社がいまの電子本の原型をつくりあげる。いまはそのつづきです。つまりアマゾン+アップル+グーグルの3社がリードする脱パソコンと電子出版の巨大産業化の時代——。

つまり私がいいたいのはいくつということですか。

いま私たちが手にしているパソコンから携帯電話にいたる多様な電子機器の底には、その遠い祖先であるヴァネヴァー・ブッシュの「メ

メックス」構想が埋まっている。

そして、その「メメックス」の夢をつきうごかしていたのは、いまもいったように、「はてしなく増大する情報を紙だけではもう処理しきれないのではないか」というブッシュの不安だったわけですね。その不安を初期のパソコンだけでなく、とうぜん、初期の電子本も動機として共有していた。この20年間、私はずっとそう思いつづけてきました。

だって、そうでしょう。だれもがじぶんのいいたいことを自由にいう。つまり出版民主化。そのことは、紙と印刷の本の生産量が極限にまでたった20世紀には、すでにかなりのレベルまで達成されていた。かなりのレベルとはどういうレベルか。結果として本が増えすぎ、それをどう保存し、使いこなしていけばいいのか、だれにもわからなくなりました。それほどのレベルにまで、ということです。

具体的にいえば、19世紀なかば、1850年に世界で出版された本のかずは5万点。それが100年後の1950年には25万点にふえ、2000年には100万点です。いまはもうそれを大きく超えてるんじゃないですか。

それに反比例して世界中で本が売れなくなり、人びとが本を読まなくなった。出版産業も図書館界も、どう対処していいかわからず、ただ呆然と途方に暮れている。

この急増する紙と印刷の本のうちには、もちろん科学論文や専門雑誌がふくまれます。紙によって支えられてきた繁栄が、紙の力をこえて自壊しかけている。だからこそ、ヴァネヴァー・ブッシュも「メメックス」というアナログ・コンピュータによって、なんとかその混乱をのりこえようと考えた。

この「メメックス」に示された紙の文化への危機感覚は、アメリカと日本を問わず、電子本を最初に提唱した人びとによっても分かち持たれていたと思います。これまで紙に負わされてきた重荷が、もう紙だけでは負いきれなくなりました。その紙に負いきれなくなったものを、こんどはデジタルが負ってみせるぞという気概ですね。あるいは構想力の大きさ――。

では現状は？

よその国はさておき、日本の電子本、電子産業についていえば、売れる売れないのビジネス一本槍。つくる側も使う側も、それが当然であるかのようにふるまって疑わない。

――そんなことで紙が抱えこんでしまった危機の深さにほんとうに対応できるのかね。

と私は思いますが、いまここでその点に深入りするつもりはない。このあとに再録する「紙が消えたらどうしよう」という文章を併せて読んでいただき、こんなことを感じているやつもいるのか、と思っただけであれば幸甚です。

❖紙が消えたらどうしよう

1

コンピュータの普及によって、やがて紙が不要になるかもしれない。そこで、ひところは「ペーパーレス社会到来か！」などという煽り文句が、新聞や雑誌にさかんに登場していた。最近はあまり目にしない。あたりまえだ。ワープロで原稿を書けば、以前、原稿用紙で書いていたときにくらべて推敲のチャンスが飛躍的にふえる。そのたびにプリントアウトをとる。数枚、いや10数枚とる人だってまれではない。一事が万事、コンピュータによって紙の消費量が自動的にへるなどということはありえない。逆に、ふえる場合のほうがはるかにおおいのである。

こうした結果にせつして、おおくの人が「ごまア見ろ」と腹の底でひそかに快哉をさげんでいる。紙が勝ってコンピュータが負けた。紙と人間とのしたしい関係にコンピュータごときが割ってはいる余地はないのだよと。

気もちはわからないでもないが、本気でそんなふうに感じているのだとしたら、ちょっとなさけない。おセンチすぎるのではないかとおもう。

たしかに紙と人間とのかかわりの歴史は古い。105年、後漢の宦官技術者、蔡倫が紙を発明したという伝説を信じるならば1900年間、じっさいには、おそらくそこに数百年を加えたぐらいの長い時間を人間は紙とともに生きてきた。日本でいえば1400年。ヨーロッパは東アジアよりもかなりおくれて800年ほど。ただし、その間、人間は一貫して、いまと同じようなしかたで紙とつきあっていたわけではない。だいいち紙の生産量が、いまとは比較にならないほど少なかった。こうした状態が一変して、人間が紙を空気や水のように使いたいだけ使えるようになったのは、ようやく20世紀にはいって、おもいきりさかのぼっても、せいぜい19世紀なかばすぎのことにすぎない。

「この紙消費量の増大は、またたくまに勢いをました官僚主義に由来する書類の増大と緊密にむすびついていた」

そしてそれを、産業革命が可能にした紙の大量生産と、さらには驚ペンから鋼鉄製のペン先、万年筆、タイプライターにいたる筆記用具の革新がしっかりささえたのであると、フランスの書物史研究家、アンリ＝ジャン・マルタンが『書くことの歴史と権力』（1988年、私が読んだ英訳は1994年、シカゴ大学出版部）という本で書いている。第二帝政期には30万人だった公務員のかずが、第一次世界大戦前夜には65万人に急増した。いまは地方政府をふくめると430万人。フランスにおける紙消費量は、この公務員数の増大に正確に比例してふえてきたらしい。

コンピュータが紙にとってかわる。そのことをよしとするのが「ペーパーレス社会」の考え方である。でも現実には、コンピュータが紙に全面的にとってかわる可能性はきわめて少ない。それどころか、コンピュータ技術の普及がペーパーレス社会の到来を、逆に、どんどんおくらせているようにさえ見える。

そこで、おおくの人がひそかに快哉をさげぶ。この「おおくの人」のおおくはたぶん本好きの人である。人間にはコンピュータにゆずつ

てはならないものがある。その「ゆずってはならないもの」のシンボルとして本を考えようとする人たちといってもいい。本とはなにか。印刷した複数の紙を四角くとして表紙をつけたものだ。したがって本好きの人びとにとって、「ペーパーレス社会」のかけ声は、とすれば、オーウェルの『一九八四年』やブラッドベリの『華氏四五一度』のごとき、ある種の反書物的な悪夢と感ぜられてしまう。そのかけ声が近年、とみに迫力のないものになってきた。ざまア見ろ、いい気味だということになる。

でも、これは勘ちがいなのである。なぜなら、「ペーパーレス社会」という場合の「ペーパー」とは、「書物」以前に、まずは19世紀以後、普遍化する官僚主義とむすびついて増大してきたとアンリ＝ジャン・マルタンがいう「書類」をさしているのだから。普遍化とは、20世紀にはいって、この書類中心の官僚主義がフランスのみならず全地球的なシステムになり、学校や企業や軍隊など、ありとあらゆる組織をつらぬく共通原理になったことを意味する。

先日、インターネット版の読売新聞を見ていたら、そこに菊田昌弘「紙から電子へ——山積する課題」という興味ぶかい文章がのっていた。

菊田氏は長い経験をもつ情報技術者である。ある日、「環境庁では520人の職員が年間110トンの紙を消費している」という新聞記事を読み、そこから霞ヶ関全体（約4万人の職員がいる）ではおよそ8000トンの紙を消費しているはずだと「大胆な推計」をこころみだ。ざっと計算して1年で16億枚、職員ひとりあたり4千枚の紙を消費していることになる。

「ちなみに、8000トンの紙情報をCD-ROMに置き換えたとすれば、およそ120キログラムで済む計算である。また、すべてが郵送されると仮定して、1封筒当たり5枚の紙として推計すれば3億通の郵便物が消失するに等しい。もちろん、この推計はあまりに乱暴であるが、情報の電子化とネットワーク利用が実現されたとすれば、情報そのものの総量を変化させることなく、重量がおよそ7万分の1となり、交通負荷が激減し、しかも瞬時に情報伝達が可能となり、国民経済的に考えた場合の社会コストは大幅に削減可能となろう」

書類なくして役所なし。官僚主義とは書類主義の別名なのだということがよくわかる。ペーパーレス社会の眼目は、なによりもまず、こうした官僚機構に代表される紙の大量消費にどう歯止めをかけるかという点にあった。なにも「本の文化はもう古い、これからはマルチメディアの時代だ」などと、本好き人間におどしをかけているわけではないのである。

ただし、紙の世紀、20世紀もどんづまりまできて、いまや紙ののんべんだらりと消費しまくっているのは中央や地方のお役所にかぎらない。企業や学校だけでもない。書物や雑誌や新聞だって、まごうかたなき大量消費の当事者なのである。その意味で、ペーパーレス社会の主張には、こんにちの本の文化にたいする批判も少なからずふくまざるをえない。そのことを忘れて、本を人間的なもののシンボルと信じてうたがわれないのは、やはり、ちょっとおセンチすぎるのではないだろうか。

私は日本敗戦の数か月まえ、1945年4月に、当時はまだ国民学校とよばれていた小学校にはいった。子どものつねで、ならったばかりの文字をおもいきり白い紙のうえに書きなぐってみたい。もちろん絵もかきたい。それなのに肝腎の紙がどこにもない。紙がほしい。紙をくれ。字や絵がかける紙ならなんでもいいから。

そんなある日、友だちが、
「駅のそばの銀行の裏に紙が捨ててあったよ」

とおしえてくれた。学校の帰りに、いそいで行ってみたら、友だちがいったとおり、使用済みの事務用紙が銀行の裏口に小さな山になって捨てられ、そのうちの何枚かが夕方の風にあおられて街路に舞っていた。じっさいには仙花紙かなにかの粗末な紙だったのだろうが、ひるがえる事務用紙の裏側の白さが、紙に飢えた私の目にピカピカ光って見えたことをおぼえている。

これはあとになって知ったことだが、戦災や軍需工場化によって製紙工場の大半が機能不全におちいり、なおかつ、それまで日本の木材パルプのほぼ50パーセントをまかなっていた樺太の大森林地帯が失われた結果、当時、この国の紙生産量は、じつに戦前の15パーセントほどに激減してしまっていたらしい。

もう一つ、私は、というか私の年代の中小出版社の編集者は、1973年のオイル・ショックによる紙飢饉にさんざん痛めつけられた経験をもっている。

なにせこのときは、ほんの数週間で、とつぜん市場から紙が消えてしまったのだからおどろいた。そのころつくった本、たとえば私の友人デイヴィッド・グッドマンの『逃亡師』や、藤本和子が訳した『レニー・ブルース自伝』などを見ると、いまま胸が痛む。紙が足りないので、通常はページあたり43字づめ17行ぐらいの四六判の本が、47字づめ19行になっていたりする。天地左右の余白も極端にすくなく、おまけに裏ぬけがきつい粗末な紙だから（私たちのような小出版社ではそんな紙しか手にはいらなかったのだ）、とうてい考えていたような本はつくれない。本文の9ポイント活字をより小さな8ポイント活字にせざるをえなかったことさえある。泣きたくなるほど、くやしかった。

こうした紙飢饉の経験から、私は二つの確信をえた。私たちの社会や文化は、紙といふはかない物質に、ふつうに考えるよりもはるかにつよきたよりきっている。したがって、もし紙がなくなれば、いや完全になくならなくとも、かりに紙の生産が半分になっただけでも、いまある私たちの社会や文化は致命的な打撃をうけることになるだろう。それが確信の第一である。

そして、もう一つ。紙は永遠ではないし、つねに安定供給されるわけでもない。戦争であれオイル・ショックであれ、なんらかの原因があれば、この社会からあっさりすがたを消してしまう。日本にかぎっても、わずか半世紀で二度も消えた。このさき、おなじことが繰り返されえないという保証はどこにもないのである。

こうした体験をへて、こと紙の運命にかんするかぎり、私は頑固な悲観主義者になってしまった。現在のような大量消費をつづけていて、ほんとうに紙は大丈夫なのだろうか。もし地上から紙が消えてなくな

ったらどうしよう。そのことがいつも心配でならない。いってみれば理論よりも個人的体験にもとづく環境保護派である。おセンチなのは私のほうなのかしらん。

さきほど私は、人間が紙を使いたただけ使えるようになったのは、せいぜいこの100年、ギリギリ拡大して考えても150年のことにすぎないと述べた。ことわるまでもなく、このいい方は、あまり正確でない。人間がではなく、ただしくは、日本や欧米などの先進諸国の国民が、と書くべきであった。なにしろ地球上には慢性的な紙不足になやんでいる人間がまだいくらもいるのだから。

たとえば蔡倫の国、紙発明の地、中国がそうである。私の在日中国人の知人は、いつも使用済みの封筒を裏返して糊づけしたものを再利用している。中国にいたときのくせが日本にきても抜けないのだとか。なつかしい。これとおなじことを、むかし私たちもやっていた。中国の新刊書を見れば、書籍用紙の中心があまり質のよくない再生紙であることがわかる。教科書は先輩や兄さん姉さんのおさがり。すべて戦後の日本とおなじ。

中国旅行からもどった人が、「いやあ、ホテルのトイレット・ペーパーがひどくてさ、まいったよ」などと先進国人ぶっている。

でも、じつは、ひどくてさいわいなのだ。考えてもみよ。現在、日本の人口は1億3千万。ひとりあたり平均して年間240キロの紙を消費している。他方、中国の人口は推定13億。ひとりあたりの紙使用量は20キロ。その13億の民が21世紀にはいって、経済の高度成長につれて自制心をうしない、日本人なみに上質の紙（ふわふわとやわらかく真っ白なトイレット・ペーパー）を大量消費するようになったらどうなるか。

日本にくらべると中国の森林面積は圧倒的にすくない。そこで木材パルプはおもに輸入にたよることになる。いまでさえ日本やアメリカの製紙会社は、伐採したあとに植林し、植林したものを伐採し、という繰り返しかえしによって、ようやく紙の大量消費をまかなっている。中国の紙消費量の急増はこうした循環構造を、あつというまに崩壊させてしまうだろう。おまけに、そこに中国に対抗意識を燃やすインド九億の民が加わってきたとしたら。このときひきおこされる全地球規模での紙飢饉のすさまじさ、底の深さたるや、戦後やオイル・ショック時の日本の比ではないにちがいない。

こういうことがとつぜん起こるとは私も考えていない。でも徐々にならば確実に起こりうる。なんとかして「紙なしの成長」を実現しないかぎり、21世紀の世界がいずれ慢性的な紙不足になやまされるようになるのは、ほとんど疑問の余地のないことのように私にはおもえる。

私は自他ともにみとめるヘビースモーカーである。だから街でも家庭でも、たばこをプカプカふかす人間にそそがれる冷たいまなざしをたえず意識していなければならない。20世紀末の世界が喫煙者にとってかくも苛酷な状況になるなどとは、100年まえのたばこ好きの紳士たちは想像もしていなかったろう。

100年というのは、その間にどんな突拍子もない変化が生じてもおかしくないほどに長い時間なのだ。したがって、いまから100年後、人までで平気で分厚い本を読むような無神経な人間にたいして、こん

にちの社会で喫煙者にそそがれるのと同様の冷たく批判的なまなざしが向けられるようになったとしても、私はおどろかない。のみならず、本を読まない人間のかずが世界中でどンドンふえている。これからもさらにふえつづけるにちがいない。本を読まない人間に本を大量に読みたがる人間への同情を期待してもむだである。まさしく非喫煙者に喫煙者にたいする同情をもとめてもむだであるように。

私も本は大好きである。いまある本のかたちを大切におもい、それなしでは生きていけないとすら感じている。その意味では、私もまた、れっきとした本の保守主義者の一員なのだ。

しかし、その一方で私は、本というものを、いつ消えてなくなるかもしれない、はかない存在としても感じている。紙が永遠でない以上、これはとうぜんであろう。とすれば、私のような本の保守主義者にできることはそんなにたくさんはない。コンピュータであろうとなんであろうと、利用できるものはなんでも利用して紙への負担を軽くしてゆくこと。そして紙の消滅点をすこしでも先おくりすること。ペーパーレス社会の挫折に快哉をさげんでいられるような余裕は私にはない。

本原稿は『図書』1998年6月号、のち『読書欲・編集欲』に収録されたものです。



津野海太郎

1938年生まれ。早稲田大学文学部卒業。黒色テント68/71に拠って演劇運動を展開するとともに、雑誌や単行本の編集にかかわってきた。著書『ベストと劇場』『悲劇の批判』（晶文社）『門の向うの劇場』（白水社）『本とコンピューター』『本はどのように消えていくのか』（晶文社）など

ドットブック (.book) と EPUB 3 組版と Web の調和

株式会社ボイジャー プロジェクト担当 小池利明



2012年6月にニューヨークで開催されたIPDF主催のDigital Book 2012。世界中から電子出版関係者が集まる中、EPUB 3の最新の動向が紹介された。参加者は1000人超を記録した。

海外、特にアメリカでの電子書籍の普及はめざましいものがあります。EPUB 3が日本語対応したこともあり、日本でのさらなる電子書籍の普及が見込まれます。電子書籍に抵抗がある方でも、手軽に電子書籍を読むことができる、そして電子ならではの楽しみ方ができるようになってきています。そして、近いうちに「電子で読む」ということが当たり前になっていくでしょう。読者の方には、そんな手軽になっていく電子書籍の「今」を、そして作り手の方には、紙の書籍の文化を踏襲しつつ、世界標準である「EPUB 3」での作り方の指針を提示します。では、WebとEPUB 3の関係からはじめましょう。

❖ Web と EPUB

▽ EPUB の実態は Web コンテンツを ZIP 圧縮したもの

「EPUB とは何か」その説明はいたるところで目にするのでしよ

う。一般的には「IDPF (International Digital Publishing Forum) という電子書籍標準化団体の推進するファイルフォーマット規格であり、HTML や Web ブラウザソフトのオープン性を保持しつつ、モバイルデバイスやノートパソコンなどでオフラインでも読書できるようダウンロード配信を前提にパッケージ化された、XHTML に基づいた規格」となりますが、今回はその中の

- ・HTML や Web ブラウザソフトのオープン性を保持
 - ・パッケージ化された、XHTML に基づいた規格
- というところに着目してみます。わかりやすく言えば、「EPUB とは、Web コンテンツを ZIP 圧縮したもの」です。

▽ Web ブラウザと EPUB リーダー

では Web で表現できることは、全て EPUB で表現できるのでしょうか？

仕様上では可能です。しかし EPUB は Web ページではありません。ページをめくって読んでいく「書籍」です。当然 Web ページと書籍では、できること／できないことは違います。

その、できること／できないことの境界線はどこにあるのか。Web ブラウザと EPUB リーダーの違いから考えてみましょう。

▽ スクロールとページネーション

Web ブラウザでは、通常はスクロール動作になります。Web ページを作る場合には、

- ・PC (あるいはデスクトップ) では、モニタサイズは最小でも 1024px
 - ・ブラウザで、横幅 1024px を確保すれば横方向にはスクロールは発生しない
 - ・縦方向のスクロールは許容する
 - ・モバイルでは、モニタサイズは 320px を想定し、横スクロールは発生させずに縦スクロールは許容
- するようなポリシーで設計することが多いと思われます。いずれにせよスクロールは前提となっています。

一方、EPUB リーダーでは、通常はページネーションを行います。あるサイズのページにおさまらぬテキストは次のページに送られます (これをリフローと言います)。

ブラウザでのスクロール表示と EPUB リーダーでのページネーションの違いを意識すれば、Web でできることと、出版としてできる

Web ブラウザで見る Web ページの例。縦にスクロールすることを前提としている。一定の横幅を確保すれば横はスクロール無しの表示ができる。

電子書籍の場合には、ページ内におさまらぬ文字は次のページに送られる。マガジン航掲載「震災の後に印刷屋が考えたこと」(古田アダム有)を BinB で表示。

ことを分けて考えるべきであることがわかれると思います。

EPUB は様々なプラットフォームで閲覧されます。モニタサイズ(あるいはウィンドウサイズ)も様々です。そのため、特定のサイズをターゲットにしたデザインを行なうのではなく、ウィンドウサイズに関わらずリフローを前提とした緩いデザインが適しています。

EPUB では Media Queries が使えるんだから、スクリーンサイズで別の CSS を読むようにすれば、スクリーンサイズごとに最適なデザインができるんじゃないの？

EPUB の仕様としてはもちろん可能です。雑誌のようにレイアウトを重視するコンテンツでは有効でしょう。しかし、Media Queries を使っているとスタイルを読み飛ばす EPUB リーダーも存在します。

ですから、通常の本の場合、あまりデザインを固めすぎず、リフローによるレイアウトを EPUB リーダーにゆだねた方がいい結果を得られます。

▽ネットワークコンテンツとローカルコンテンツ

原則として EPUB リーダーはローカルにあるコンテンツ(PC やスマートフォン、タブレットなどのデバイス内にあるコンテンツ)しか表示できません。

EPUB 3 では JavaScript も使っていることになったんでしょ。だったら Ajax でサーバにリクエストかけて、動的生成したコンテンツを表示すれば、ネットワーク上のコンテンツだって表示できるよ！

EPUB ファイルとしての仕様上はそれが可能です。しかし、やるべきではありません。EPUB 3 のリーダーでは、JavaScript 解釈の実装をしなくても良いことになっているからです。セキュリティ上の配慮から JavaScript 解釈を実装しない EPUB 3 のリーダーも存在します。すべての EPUB 3 リーダーで表示させたいのなら、JavaScript を使ったネットワークコンテンツの動的表示は使わない方が良いでしょう。

❖ ドットブック (.book) の日本語表現力

▽電子出版の歴史

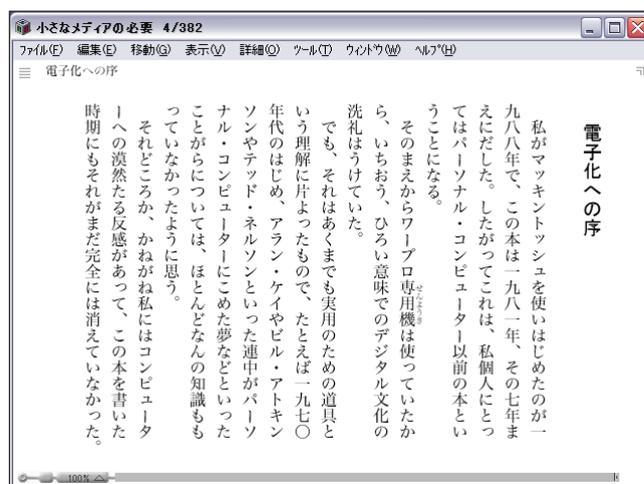
ここでボイジャーと電子出版との関わりについてふれてみます。

ボイジャーでは 1991 年に米国で「エキスパンドブックツールキット」というツールをリリースし、電子出版をスタートさせました。まだ電子書籍という言葉がない時代です。この当時のエキスパンドブックは横書き表示で、満足のいく日本語書籍とは言いがたいものでした。そこで 1995 年に、「縦書き」「ルビ」「禁則」といった日本語書籍の表現をとりいれた日本語対応の新バージョンをリリース。その後間もなくこれを使った新潮社の『新潮文庫の 100 冊』CD-ROM が発売されました。

当時の標準的なモニタは、現在普及しているものに比べ、とても解像度の低い 13 インチ /72dpi/640 × 480px というものでした。レイアウトもほぼ固定で不都合もなく、ある意味で完成していたと言えるでしょう。

しかしモニタの大型化にともない、固定されたレイアウトではなくウィンドウサイズに応じたリフローによるレイアウトが必要とされてきました。一方、インターネットの普及にともない、Web ブラウザで横書き表示されているページを縦書きで読みたい、という欲求も生

まれました。そこでリリースしたのが T-Time (ティータイム) というリーダーです。その T-Time が採用している電子書籍のフォーマットがドットブック (.book) です。ドットブックは「組版ルール」にこだわったフォーマットでもあります。



ドットブック『小さなメディアの必要』(津野海太郎著)による表示例。縦書き、見出し、ルビ、禁則処理といった組版ルールに従いつつ、リフローによるレイアウトを実現。

▽組版ルール —— 取り入れたもの、切り捨てたもの

「組版ルール」とは、日本語の書籍をデザインするときに使われているレイアウトのルールのことです。たとえば、字間、行間、ページ余白、禁則処理、等々があります。これらは固定の紙のページを前提としたものです。ドットブックの仕様を作る時には、「リフロー可能な電子メディア」という前例がないものに対して、どこまで組版ルールを適用するか、試行錯誤を繰り返しました。

ドットブックでは、文字の位置をピクセル単位で指定して動かすなど、かなり細かな組版を実現する機能も用意しています。最初のうちは、それらの機能を駆使して紙の書籍に近いことを追求していたこともありましたが、紙に近づくことを必死に考えていたのです。しかし、経験を重ねるうちに、だんだんそういったレイアウトは少なくなっていきました。「特定のページサイズでは、ものすごく紙に近い理想的なレイアウトだが、他のサイズでは望ましくないレイアウト」よりも「どんなサイズでもある程度きれいにみえるレイアウト」のほうが望まれた、ということです。

電子書籍だからといって組版ルールを無視したわけではありません。組版は、ある程度のページサイズと 1 行の文字数が確保されていることが前提です。

例えば、1 行の文字数が 20 文字以下の場合に、追い出しや均等割付はしないでしょう。文字間がスカスカして、かえって違和感を感じるでしょう。割注などもリフローには不向きです。そういったものは、割り切って切り捨てていきました。切り捨てることで、さまざまなページサイズにも対応できる最適な方法を手に入れて行きました。ドットブックは、結果としてリフロー型ページネーション電子書籍におけるボイジャーの組版ルールへのこだわりを示していると言えるでしょう。

それでは、EPUB 3 における表現はどのようにになっているのでしょうか。

❖EPUB 3の日本語表現力

▽EPUB 3の日本語対応とは

「EPUB 3で日本語に対応した」とは、何を意味しているのでしょうか。

読者が目にするものは、まず縦書きでページが右から左に進むこと。ふり仮名(ルビ)や圏点が使われていること。そして、文中の数字などが縦中横で表示されていることなどです。

仕様の面からいうと「EPUBで規定された」ということは、大きく3つに分類されます。

- ・EPUB独自の規格として規定
- ・HTML5で規定されたものをEPUB3で採用
- ・CSSで規定されたものをEPUB3で採用

▽EPUB 3独自の規格として規定

EPUB 3独自の規格として規定されたものの代表例は、日本語書籍に必要な機能として採用されたページの進行方向の指定です。

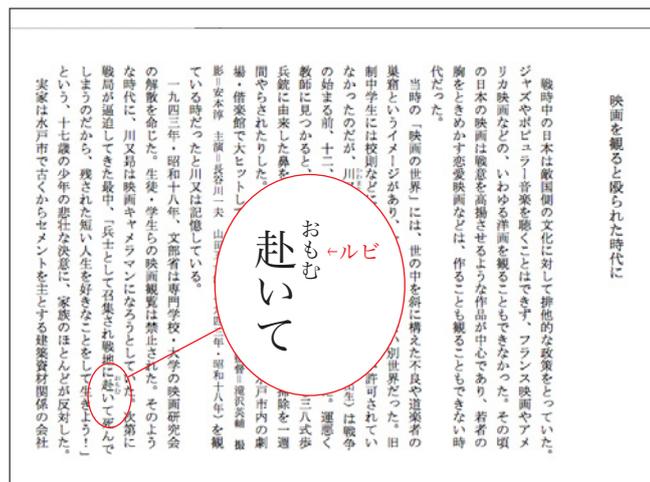
EPUBではパッケージ文書(OPF)というファイルの中で、

- ・書誌情報
 - ・構成ファイル
 - ・構成ファイルの再生順
- を定義します。

ここでpage-progression-directionという属性が用意されました。この属性に対し、「rtl」(Right to Left、右から左)という値をセットすると、右から左に読み進む、という縦書きの日本語書籍のページの進行方向が可能になります。

▽HTML5

ルビについては、HTML5のruby要素で実現できました。
<ruby>漢<rt>かん</rt>字<rt>じ</rt></ruby>



ルビの表示例

『カメラを振り回した男
撮影監督・川又昂の仕事』
川又武久著

▽CSS 3

日本語で特徴的な表現の多くはCSS 3規定が採用されました。CSS 3はまだワーキングドラフトの段階ですが、EPUB 3でどこまでの範囲を使うことができるかは既に規定されています。「縦書き」はwriting-modeというCSS Writing Mode Module

Level 3のプロパティを使います。EPUBで使用するためには、プリフィックスを付けて、

-epub-writing-modeと表記します。

この値としてvertical-rlを指定すれば縦書きになります。

「縦中横」もCSS Writing Mode Module Level 3のプロパティであるtext-combineにプリフィックスをつけて、

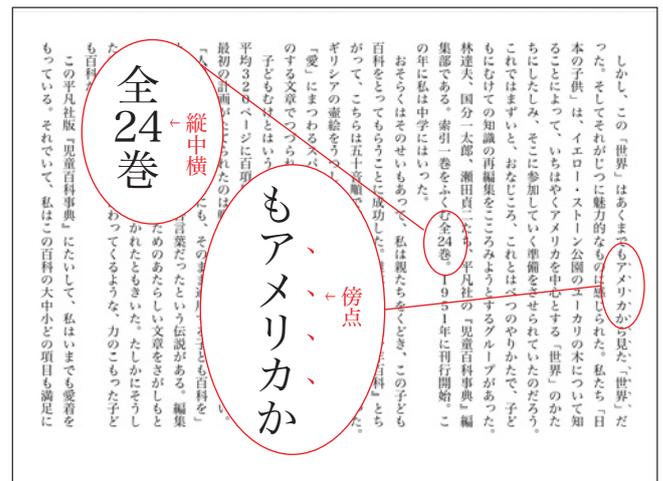
-epub-text-combine:horizontal;

のように指定します。

「圏点」は、CSS Text Level 3のtext-emphasis-styleを使います。

-epub-text-combine:filled sesame;

とすれば、「黒ごま傍点」になります。



縦中横と傍点の表示例

『小さなメディアの必要』
津野海太郎著

▽どのように見えるのか？

EPUB 3で日本語の電子書籍を作ったとき、作ったものが正しくできているのか、どのように見えるのか？確認したいわけですが、実は、現時点で普及しているEPUBリーダーのほとんどはEPUB 3に対応していないため、正しく表示されません。

EPUBはZIPでパッケージングされているので、解凍すればHTML5ファイルが現れます。それぞれのHTML5ファイルをSafariやGoogle Chrome等のブラウザで開いてみると、縦書きやルビ、縦中横などの表示ができています。しかしページネーションをしたらどうなるか、ページめくり方向は正しく設定されているのか、EPUB 3でうまく表示できているかはわかりません。

そこでIDPFのプロジェクト、Radiumの登場です。

▽Radiumプロジェクト

EPUB 2からEPUB 3への仕様改訂は、日本語対応含め、大きなバージョンアップでした。EPUB 3を正しく動作・表示させるリーダーが無いことは、EPUB 3普及のための足枷となりかねません。そこでEPUB 3のための参照用のリーダーを開発し、EPUB 3を普及させるためのプロジェクトが生まれました。

そのためのプロジェクトがRadiumです。

Radiumでは、EPUB 3がどのように動作し、表示するのが正しいのかを参照するためのシステムを提供します。これはオープンソースなのでだれでも利用できます。

現在はGoogle Chromeのエクステンション(拡張機能)として開



Radium プロジェクトの Web ページ (<http://readium.org/>)
世界中の電子出版関係者が集まり、オープンな場で開発が進んでいる。

発が進められています。

ボイジャーも、ドットブックで培ってきた日本語書籍の表現についての経験をもとに、Radium プロジェクトに参画し、よりよい電子書籍の環境実現のため貢献しています。

以上、

- ・ EPUB は Web コンテンツを ZIP 化したもの
- ・ スクロールを前提とした Web ブラウザと、ページネーションを前提とした EPUB リーダーの違い

として、フォーマットとリーダーに関して説明してきました。

それでは、どのようなコンテンツを作っていったらいいのかを考えていきましょう。

❖ Web と電子出版

▽ Web ページと電子書籍の違いを把握する

ここでは、

- ・ Web 技術を使っているが、Web ではなく書籍である
 - ・ 書籍ではあるが Web 技術も使うことができる
- の両面からどんな電子書籍の作り方が望ましいのか考えてみましょう。

EPUB という電子書籍を考えたとき、「Web ブラウザと EPUB リーダーの違い」と同じくらい重要な要素として「流通」があります。制作した Web コンテンツを自由に見てもらいたいのであれば、Web に公開すればよく、有償のコンテンツにしたい場合でも、会員制の Web ページにすれば十分です。実際に HTML5 の機能を使った Web アプリケーションというのは、そういう方向を目指しています。Flash による Web コンテンツも、Flash がプロプライエタリで iOS 上で動作しないという制限があるとしても同様の方向性です。

EPUB は本です。電子書籍を 1 つ作れば、それをどんな電子書店にでも卸すことができる、そして世界中で販売することができる。多くの電子書店で販売できるというメリットは大きい。このような EPUB のメリットを生かすために、どこにでも流通させられるようなものを作ることが重要であると思いませんか？

現時点では EPUB 3 に対応した書店も少なく、初期導入時には、書店ごとに求められる EPUB の入稿の様子が異なることもあり得ます。その場合でも、特定の EPUB リーダーに最適化して他のリーダーではまったく表示できないような作り方をするよりは、できるだけ汎用性を保ち、表示できるような作り方をすべきです。書籍であろうとするならば、この点は真剣に考えていかなければなりません。

我々はプラットフォームに依存しないブラウザベースの読書システム BinB (ビー イン ビー) を構築すると同時に、どこにでも流通できるようなコンテンツ作りを推進してきました。

そのような作り方は、表現を制限するということでしょうか？

Web コンテンツでも、ブラウザごとに書き分けたり、ブラウザのバグ (仕様?) による不具合を回避するために複雑なコードを書いたりということは行われてきました。その悲劇を繰り返すのは馬鹿げています。

▽ 流通を意識した EPUB 3 制作のポイント

4 つの大切なポイントを説明しましょう。

必要以上にスタイルを指定しない

「構造とスタイルの分離」ということを聞いたことがある人もいるでしょう。

「構造」とは、タイトル、見出し、本文といった文書構造に関するもので、「スタイル」とはそれらをどのように見せるかという装飾に関する指定をするものです。

EPUB の場合には、HTML5 文書で文書構造を定義し、その装飾は CSS で行います。

先に書いたように、縦書きの日本語書籍の表現方法で、縦書き、縦中横、圏点といったものは CSS 3 を使って指定します。それらは指定しなければそもそも縦書きとして成立しません。スタイルの中には指定せずにリーダーのデフォルトにゆだねたほうがいいものもあります。例えば、背景色や文字色については、背景色 = 白、文字色 = 黒、といった指定はあえてしなくてもいいでしょう。

文字サイズは、ピクセルやポイントなどで指定してしまうと、様々な解像度の端末で小さすぎたり大きすぎたり、リーダーの機能で文字サイズを変更できない場合もあるので、基本となる文字サイズを `body { font-size:100%; }` のように相対値で指定し、その他の文字サイズもすべて相対サイズで指定して、リーダーに任せるといい結果となります。

一定以上のウィンドウサイズを想定したレイアウトを行わない

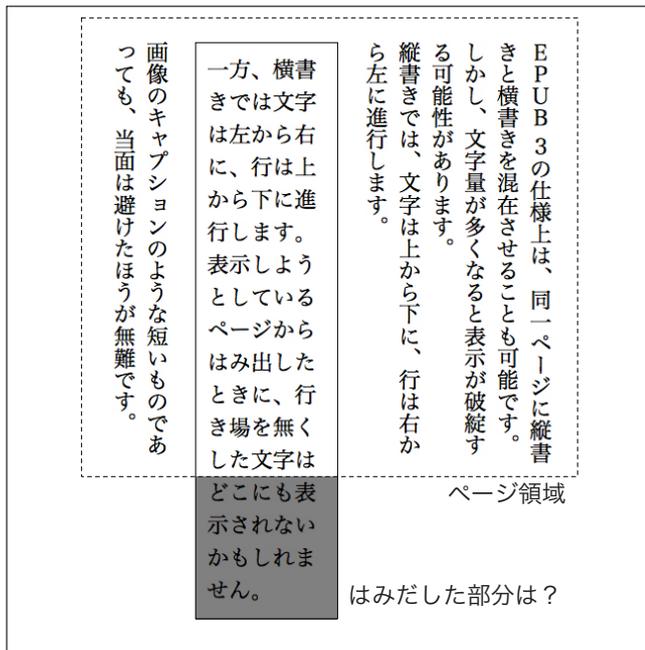
「ターゲットが○○だから、768 × 1024 以上のモニターできれいに見ればそれでいい」という作り方は危険です。もちろんターゲットとなるデバイスで一番よく見えるように作るのは重要なことです。しかしそのターゲットデバイスであっても、文字サイズを変更したり、縦持ち/横持ちを切り替えたりすると見た目が変わります。それらのパターンでよく見えるように調整するというよりも、多様なモニターサイズと文字サイズで、リフローしてページネーションが変わってもだいたい OK というくらいの作り方が安心です。

縦横の混在は？

EPUB 3 の仕様上は、同一ページに縦書きと横書きを混在させることも可能です。

しかし、文字量が多くなると表示が破綻する可能性があります。

縦書きでは、文字は上から下に、行は右から左に進行します。一方、横書きでは文字は左から右に、行は上から下に進行します。表示しようとしているページからはみ出したときに、行き場を無くした文字はどこにも表示されないかもしれません。画像のキャプションのような短いものであっても、当面は避けたほうが無難です。



表組について

表組も同様です。文書構造やアクセシビリティの観点からも、表組は表組として扱ったほうが望ましいのですが、多くの場合、表組が必要なのは、横組の表でしょう。縦書きの本文の中で、横組の表を扱った場合に、はみ出した部分が行き場を無くして表示されなくなる可能性があるため、当面は避け、画像等で代用すべきでしょう。

❖変換サポート

▽ドットブックから EPUB 3 への変換

とはいえ、EPUB 3 での販売開始はもうすぐそこまできています。ボイジャーでは、既存のドットブックから EPUB 3 への変換サポートを行なっています。

変換には「電子書籍交換フォーマット」を活用しています。

残念ながら、現時点では書店ごとに EPUB の入稿仕様が異なる場合があります。

「電子書籍交換フォーマット」を使った変換の仕組みにより、書店ごとの異なる入稿仕様にも対応しています。

▽変換を意識した制作

また、書店の対応状況もあり、当面はドットブックを作り続ける場合もあるかもしれません。その場合には、できるだけ、EPUB にす

ることを想定した作りをすることが重要です。

以下はその例です。

- ・スタイルシートを使った記述を心がける
- ・文字サイズの指定はできるだけ入れ子を行わない
- ・見出しのサイズは、見出しタグで指定する（見出しのサイズをフォントタグでサイズ指定しない）
- ・見出しの中で行揃えの変更を行わない
- ・章、節、項、といった構造を見出しに反映する
- ・外字等の記述ではコメントで Unicode 値を書くなど、他のフォーマットに変換するための情報を残す
- ・ページをまたいだ指定を行わない
- ・縦中横は「自動縦中横」の機能を使わず、個別に指定する

❖ボイジャーの BinB

▽ Radium との関係

前述のように Radium は EPUB 3 の参照システムを目的としています。

各ベンダーが EPUB リーダーを開発する際には、その成果をそのまま使ってもいいのですが、実際には Radium での実装方法を参考に、EPUB リーダーを開発することが多いと思われます。（Radium プロジェクトの中で We do not plan to develop or host a full-featured commercial-quality application based on Radium. と述べられており、Radium プロジェクト自体で商用のアプリケーションを開発することは目的としていません）

ボイジャーでは BinB というシステムで、EPUB 3 リーダーへのアプローチを行なっています。

ボイジャーが目的としている「Books in Browsers = Web ブラウザでの読書」では、あらゆる HTML5 対応 Web ブラウザ（Safari や Google Chrome だけでなく、Firefox や Internet Explorer 等も含む）で動作させることを目的としているので、Radium のプログラムを直接利用することはしていませんが、Radium を使った EPUB 3 の動作、表示を参照しつつ、開発を進めています。

▽ HTML5 ブラウザを使った読書システム

BinB は、HTML5 対応ブラウザだけでの読書を実現する仕組みです。

前に書いたことと矛盾があるように感じられるかもしれませんが、ボイジャーの BinB は、Web ブラウザを使った電子書籍リーダーです。スクロールによる表示ではなく、縦書きのページネーションを実現しています。またコンテンツ自体を Web アプリケーションで制作しているわけではなく、あくまでもリーダーです。閲覧可能なコンテンツは EPUB ファイルです（もちろんドットブックも可能です）。

BinB は、インストールしてから使用する「アプリケーション」ではありません。電子書籍リーダーを HTML5 対応ブラウザ上で動かすことで、各プラットフォーム（各種のデバイスや OS）で動作するようにしています。

アプリケーションの場合には、プラットフォームごとに開発し、配布する必要があります。アプリケーション開発には時間も費用もかか

りますし、プラットフォームによっては自由にアプリケーションが配布できない場合もあります。

しかし Web ブラウザは、多くのプラットフォームに標準でインストールされています。

できるだけ早く読者に電子書籍を届ける。そのために、Web ブラウザを使った読書環境は有効なものだと考えています。

▽ Web との連携

ここまでいろいろ書いてきましたが、電子書籍と電子出版にとって必要なものは何でしょうか。

配信用のフォーマット、表示するビューア、表示するためのデバイス、販売サイト、購入済みのあるいは無料のコンテンツを並べる書棚、関連情報の参照、感想を言い合うための場所……。

これらはいろいろな方法で実現できますし、実際にいろいろな方法が提供されています。

ポイジャーではこれらを実現するために「Web ブラウザ」をすべての中心に考えました。

Web ブラウザを使えば各種の連携が大変スムーズになるばかりでなく、リーダーアプリケーションのインストールの手間などからも解放されます。

書籍を探すためには、SNS 専用アプリを使うこともありますが、すべての SNS は Web サービスです。SNS の中で紹介した書籍は、Web ブラウザのリンクですぐにその書籍へアクセス可能です。電子書籍を販売している書店も Web 上にあります。Books in Browsers のシステムであれば、Web 上の書店から購入した電子書籍を、ダウンロードしてアプリで開くという手間をかけることなく、そのまま Web ブラウザで表示します。そしてポイジャーの BinB は、HTML5 対応 Web ブラウザでの文字組エンジンを用意しているので、PC でも、iPhone/iPad でも、Android でも（非公式ですが Linux でも）ブラウザでそのまま読み始めることができます。購入した書籍はクラウドの書棚にあるので、PC で途中まで読んで続きをスマートフォンでというシンクロする読み方もできます。

気に入った本を twitter や Facebook で紹介することもできます。BinB システムでは、単に紹介するだけでなく、twitter や Facebook



© 2012 Petit Kashima

左側が BinB での表示。右側が著者のブログ。エンベッド機能を使用することで、ブログに電子書籍を表示できる。BinB に移動をしなくても、ブログ上で本が読める。

の中にそのまま本をはりつけて読んでもらうこともできます。

紙の書籍には入りきらなかった資料を電子版には収録したいということもあるでしょう（p18～19 参照）。

EPUB という配信ファイルの中に、そういった資料や映像等を含めることも可能です。どんどん増えていく参照情報は、Web 上に用意して、そこでさらなる広がりをもたせてみると、本が楽しく広がります。

もちろんすべてが実現できているわけではありません。

多くの課題もあります。

しかし、オープンスタンダードなフォーマットである EPUB と、Web ブラウザだけで、宣伝から販売、読書、ソーシャルリーディングにいたるまでをカバーする BinB は、これまでに無かった読書環境を実現していくでしょう。

デジタルがあなたに与える力があります。

あなたは作家でもあり、編集者でもあり、出版者でもあり、そしてそれを支える読者でもあります。

電子出版という世界を生み出す重要な主役を担っているのです。

ありものの輝き——古くて新しい表現

株式会社ボイジャー 代表取締役 萩野正昭

よく「電子出版ならではの作品」ということがいわれます。要するに紙の本の焼き直しばかりのこの世界を揶揄しているのでしょうか。けれど都合よく使っているだけで何のことなのか、言っている本人もハッキリとは分かってはいないはず。あえていうなら紙の本ではできない、音や、アニメや、映像や……こうしたコンビネーションの巧みな作品を指しているとおもいます。新しい技術が生まれると、新しさの意味を理解するために、ふさわしいコンテンツが求められます。コンテンツを見ることで多くの人が新しい技術の可能性を容易に感じ取れるからです。そのために、云ってみれば無理矢理にコンテンツはつくられてきたのです。

私はこの傾向に少々異議をとなえたいです。電子的なコンテンツ一般に対して、新しい表現が期待されてきたことは確かです。また、新しい表現にチャレンジすることを否定するものでもありません。けれども、新しいことの中にある技術依存は、つくられた作品の生命を左右することが多いことをまず知っておくべきでしょう。これは1990年代の初めに起こったマルチメディア時代の教訓です。

当時の作品のほとんどは現在見ることはできません。作品を見るためには、作品を保存するだけではなく、当時の稼働システムまでも残しておかねばならないのです。このことは、デジタルでのコンテンツ出版とは、その時代のコンピュータ、あるいはシステム論理に基づいて開発されたデバイスの上で閲覧することを前提としている、ということを変更して私たちに認識させています。まさに「電子出版ならではの現実がここにあるのです。

紙の本ではどうでしょうか？ 本は、ひとたび出版されるとその形を半永久的に残していきます。消滅させることはたやすいことではありません。出版社が消えたとしても、本は残ります。手にとり、時間を越えて読むことができる、実に簡潔な分かりやすさです。

音や映像はどうでしょうか？ 記録媒体に左右され、録音テープは時代とともに形状を変えましたし、ディスク状になり、メモリーカードにもなりました。映像もフィルム、テープ、ディスク、メモリーと、同じような変化を伴ったわけです。けれども、視聴する内容が変化したわけではありません。そこが「電子出版ならではの」と激しく異なるところです。私は電子出版はむしろ、出版という先行したメディアを前提として、そこから発展する何かを見いだす旅に出るべきだとおもっています。

ある一つの例をお話します。ロサンゼルスにアカデミー賞で有名な財団が運営する図書館があります。ここにはたくさんの映画に関する書籍・資料が保管されているのですが、ある時、黒澤明が監督しようとして果たせなかった映画『虎 虎 虎』の準備稿シナリオがあることがわかったのです。

この映画は、別のシナリオ、別の監督で『トラ・トラ・トラ！』として1970年に公開されますが、当初は黒澤明がメガホンをとることで進められていたのです。途中で降板することになった黒澤監督は、

自分が関わったこの映画の記録すべてを廃棄したのです。ですから彼が最初に参加して書かれた準備稿『虎 虎 虎』も行方がわからなくなっていました。



存在が確認された、シナリオ準備稿『虎 虎 虎』黒澤明、小國英雄、菊島隆三 著の複写コピー。A4サイズで700枚ほどの分量があった。複写数量に制限があり、規則に従うと全部をコピーするには7年かかる計算だった。黒澤監督のご子息である黒澤久雄氏の協力により、私たちはこれをなんとか日本へ持ち帰ることができた。

Academy Foundation Margaret Herrick Library 所蔵

このシナリオは、コピーが日本へ運ばれ、著作権者の許諾のもとに電子出版されました。真珠湾攻撃からちょうど70年を経た2011年12月8日のことです。現在無料でそのすべてを閲覧することができます (<http://tt2.me/12548>)。

このことがあって、私たちは関連する様々な資料を目にすることがになりました。見たこともない貴重な情報に接することができたのです。

『虎 虎 虎』から『トラ・トラ・トラ！』へ、この映画の全てを見届け、一貫して製作に関わったのは美術スタッフだけでした。美術監督をつとめたのは、村木与四郎さんで、そのチーフ助手として近藤司さんが担当されています。

『大系 黒澤明』(講談社刊)の編者である浜野保樹さんは、研究者として『虎 虎 虎』のたどった運命を熟知していました。浜野保樹さんの調査と尽力でシナリオ準備稿『虎 虎 虎』の存在も明らかになり、黒澤監督のご子息である黒澤久雄さんの支援もあって、そのコピーを日本へ持ち帰ることができたのです。

シナリオ準備稿『虎 虎 虎』の電子出版がなされたその時に、浜野保樹著『解説「虎 虎 虎」—— 根本的には悲劇であることが土台だ』は、同時に電子出版されています (<http://tt2.me/12552>)。

浜野保樹さんはまた、生前の村木与四郎さんとの交流から、彼が保存した資料の存在を知っていました。美術チーフ助手をつとめられた近藤司さんは81歳となられ、宝塚市に健在であることがわかりました。ある偶然も味方して、私は近藤司さんのご子息を知ることになり詳細が判明したのです。

映画撮影用に福岡県遠賀郡芦屋町の海岸には二隻の軍艦、戦艦長門と空母赤城の建造がなされたのですが、これに関わる克明な資料、写真の存在に、私たちはたどり着くことになるのです。お二人が保存された資料の中からは、黒澤監督が直筆で描かれた絵コンテ十数点も発見されています。

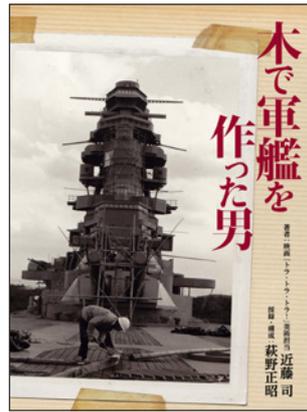
美術スタッフは映画の視覚的設計にたずさわる者です。ですから図面やスケッチ、写真という資料を一番取り扱う立場でもあったわけです。これらは、一切の記録を破棄しろ！ という黒澤監督の指示の及ばないところで、長い年月、結果として保存されてしまったといっいいでしょう。

しばらくして、私は、81歳を越えお元気でいらっしゃる近藤司さんをお訪ねしました。当時のお話を聞くためです。近藤司さんへのインタビューは、ある時代のある映画製作に関わる貴重な記録となりま

した。時代の証言といってもいいでしょう。保存されたおおくの現場写真、図面、さらに当時の見書きや予算にいたるまでを繋ぎ合わせた、この証言が出版物として世に送り出せたら……。

私たちは今を生きています。少し大げさな言い方もかもしれませんがそうでしょう。更に云えば必死に生きているのです。今やっていること、懸命にやっていること、きっと今あなたしかできない偉大なるチャレンジであるはずのもの、それは何であれどこかで潰れてしまう儂さを背負わされているもののような気がします。木で作る軍艦と同じような運命ではないか！ いかに見栄えは立派でもいつか藻くずと消え去り、跡形もなく失われてしまう……。

私は今、『虎 虎 虎』の電子出版をめぐる起こったできごとを羅列しました。出版という一つの行為から、いくつもの関連する人やモノ、事実の湧き出てくる、驚きとおののき。目を見張らざるを得ない実像が浮かび上がりました。出版に限ったことではないでしょう。世の中とは、かくも様々な関係性の中に個々が置かれているのだということの思い知らされます。これらを「ありものの輝き」と称してみました。「ありもの」だなんて、失礼な言い方とおもうかもしれません。



『虎 虎 虎』から『トラ・トラ・トラ!』へ、この映画に一貫して関わり、美術担当として軍艦のオープンセット建造を担当した近藤司さんの証言と、ご自身が保存した現場写真、図面などをリンクしながら再現する、電子出版によるノンフィクションの試み。『木で軍艦を作った男』の題名で、2012年秋、ポイジャーより刊行予定

そうではなく、存在するもの、生きているもの、死んでもそこに残された記録や資料……こう考えてください。各々に輝いている、しかし、個々を繋ぎ合わせる何か作用することで、輝きはいっそう増してくるのではないかと。ここにでき上がる文脈こそ電子出版の担うべき最初の任務であるような気がします。

近藤 司：偶然に知り合うらしいネ。なんで知り合うたん開いたらこれや云うから、えーつ云うてさ、**リンクを確認**これが、往年宝塚映画で美術チーフとして活躍され、『トラ・トラ・トラ!』では黒澤明監督、そしてその後には梶田信博監督の美術担当として村木与四郎とともに働き、北九州芦屋の海岸に巨大なオープンセット、**戦艦長門**、空母赤城をつくった近藤司さんの最初の言葉だった。すでに80歳を越えられ、さすがに老境の域にたっしたとはいえ腰鎌(かくしゃく)と、眼光、声、ともに衰えず、勢いのあるもった物腰に映画屋さんの面影をはっきりと認識することができる。さぞかし現場で大声を上げて指図されてこれたのだらうと想像できる。彼がずっと保存してきた映画『トラ・トラ・トラ!』に関するたぐいさんの資料をご提供いただいた。本当にありがたうございました。偶然に知ったきっかけを頼りに、ここまで来れるとは全く思ってもいなかった。**リンクを設定**近藤 司：僕もこれ押し入れに入れたままになっていたものネ、たまたま入院していたのやけど、女房が全部しまつてあるところを知っていたものですから。そやけれど、今頃になって目の目を見るとは、ビックリしています。まあ、今になって考えたら、よう作ったもんなやな……と思つて。

近藤司さんは、一瞬、視線を確かめ方へやるように遠くを眺めた。

年が明けて2012年1月7日、浜野保樹さんと私は、近藤司さんのご子息である近藤正司さんの手配で、兵庫県宝塚市のご自宅を訪問した。ここに語られるお話は、その時に収録されたインタビューから

『木で軍艦を作った男』の大量の関連情報と本文のリンクを操作するオーサリングツール [T-Time Anchors] 作家が自身の作品に、あるいは作品に関わった編集者やリサーチャーが、自分たちの机上で関連する付加情報をリンクさせるオーサリングツールが開発されている。デジタル処理の作業を当事者以外の第三者に委ねることなく、自身で向かいあい、完成に導いていくことができる。これからの出版物のあり方はどのように変わっていくのだろうかをいろいろと考えて、書かれた本文とネットワークに連動する付加情報のマネージメントに注目してきた。取材時に収集した写真、ビデオ、音声など、あるいは過去に遡り保存された貴重な記録などを、本と連携させる実行を、作家や研究者、編集者の手に確実に戻すことが、電子出版時代のコンテンツにとって重要なものになるだろうとポイジャーは考えている。

ふと自分の机に目をやり、そして本棚を眺めてみます。黒岩比佐子著『パンとペン』(講談社刊)、加藤馨著『脚本家 水木洋子』(映人社刊)、小倉美恵子著『オオカミの護符』(新潮社刊)、マクスウェル・テイラー・ケネディ著・中村有以訳『特攻』(ハート出版刊) …… 思いつくままにピックアップをしたままで、特別な意味があつてのことではありません。ただ、考えるに、これらの労作の成された背景にある膨大な関連著作、資料、手紙、メモ、写真というものの存在をほんやりと頭に浮かべます。作者によって精査されたこれらの情報は、

本に向かう私たちにはそのすべてが見えるわけではありません。一切は作者によって一冊の本としてまとめあげられ、精魂込めたパッケージとして私たちに届けられたものです。それが本というものであり、今、私の目の前で、読書という問いかけを経て不思議な輝きを発しているのです。 そうであるならば、本は一つのありものとして私を勇気づけ、本に込められた輝きを更に加える何かもう一つ二つの行為を呼びかけているのだとおもいます。

eBook デザインへの第一歩

株式会社ボイジャー 取締役・企画室長 鎌田純子

2010年以來、電子書籍の状況は一変した。スマートフォン、タブレットの急激な普及によって、潜在的な電子書籍読者が激増している。ライフスタイルにあわせていろいろな端末が出てきている。画面サイズもさまざま。もちろんそれは市場拡大にとっていいことではある。ただ本をデザインをする上では基準とするサイズが絞りにくくなったことを意味している。一般的には小型の端末ではリフロー型が推奨される。大画面ならば固定型の方が読みやすい。ここでは両方の良さを合わせ持つハイブリッド型のデザインについてお話したいと思う。

2011年5月ごろだったか、1つの企画が私のところに飛び込んできた。震災で職を失ったスイス人の作家が絵本を出したいという。電子で出すだけでいいならやりましょうか？ そんなお気軽な返事をし、契約やら素材やらの整備をし、半年以上たってデジタルの制作が始まった。

その間に電子書籍の状況は一変した。ファイル形式が大きくEPUB 3に傾いた。ドットブック(.book)だけを考えていけばいい時代は終わり。もう一度、グランドデザインを考え直そう。基礎の基礎からやりなおそう。私はそう決めてこの『ビビのキッズヨガ』の制作をスタートした。

◆固定とリフロー、どっちがいいの？

従来からボイジャーはリフロー型の電子書籍にこだわってきた。今までならば絵本といえどもこれからはリフローですよと押し切っただろう。ただなぜか今回はそう決めるのにためらいがあった。絵本は絵と文、作家がその両方を組み合わせて紙面を構成するものだ。リフローにするには構成要素をばらさねばならない。ただ単にリフローしたいがための手法を選んで作品を成立させられるだろうか。個人個人の表現があってこそその作品であり、作品が技術の制約でデジタル奴隷になってしまうような制作はイヤだという気持ちになった。

最初にターゲットデバイスを決めた。すべてを検証することは出来ない。機種名と画面のピクセル数、対角のインチ数(1インチは2.54cm)の情報と人気具合から、自分が標準とするデバイスを決めた。私はGALAXY S II、iPhone 4/4S、iPad/iPad 2を選んだ。

端末を横長に置いた場合をランドスケープ、縦長に置いた場合をポートレートという。1ページずつ、iPadにはめてみた。もともと横長を想定して描かれた絵本の作品だから、見栄えもなかなかいい。問題はポートレートだ。よし、と端末の向きを変えてみた。お手上げ状態の画面があらわれた。いや待てよ、ポートレートで固定で組んだらどうだろう。と、実際やってみた。それはそれはみじめな結果だった。スタッフ全員がいい顔をしない。iPhoneとiPadで同じデザインを使えばダメに決まっているか。

私はリフローと固定の両方を使うハイブリッド型を目指すことにし、リフロー型の制作を一から考えることにした。こうなって初めて一般の編集者、デザイナーはどうしてすんなり電子書籍に入って来れないのか、考えられるようになった。紙という確固たるものにくらべ



ハイブリッド型の例。固定型とリフロー型を端末の向きで切り替える。『ビビのキッズヨガ』© Bibi より 購入は <http://binb-store.com/> で。

て、電子ではデザインの土台が伸び縮みする。手のひらに乗る幅5cmの世界と机にドシンと置かれる幅30～40cmの世界を同時に考えなければならない。彼らにとってはそのことが一番難しいのだ。

私は要素を整理し、枠組を決めることにした。落ち着いて眺めれば構成要素はそれほど複雑ではなかった。文字。文字と一体にすべき絵。バラバラでも成り立つ絵。一続きの流れで見せるべき絵。一見複雑そうに見えてもシンプルな形に分けられることに気がついた。あとはどうタグをつけるかだ。2012年になって、やっと制作が走り始めた。

◆アプリが消えれば読書が変わる

出来上がった試作を著者に見せる段階で、私の著者はスイス人で日本語が読めないことに思い当たった。ボイジャーでは、現在“Books in Browsers”方式と呼ばれるWebブラウザを使った読書システムを開発している。「BinB(ビーインビー)」という。URLにアクセスするだけで、簡単に読める仕組みだ。

果たして何の英文説明もない状態で、読んでもらえるのか？ 英語で込み入った説明をせねばならないのか。この1冊のために販売システムを英語にしなきゃならないのか。うつうつとした気分であった。スタッフに設定を頼み、著者に試読用URLを送った。しばらくして電話がきた。電話の向こうではしゃいだ声がする。読めたんだ。

米国の調査では電子書籍の販売において、アプリのインストールの段階で半数が読書をあきらめてしまうそうだ。アプリなんか消えてしまえ。アプリを意識しなくなるほど簡単に読めて初めて市場が開けると思う。

★ VOYAGER

希望の灯

2012年7月4日 第1版発行

表紙デザイン 平野甲賀

本文デザイン 株式会社丸井工文社

発行所 株式会社ボイジャー

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前5-41-14

<http://www.voyager.co.jp/>

tel. 03-5467-7070 fax. 03-5467-7080

- ・本カタログ記載の内容、金額などは予告なく変更することがあります。
- ・T-Time、.BOOK/ドットブック、BinBおよびそのロゴは、株式会社ボイジャーの登録商標です。
- ・その他、記載されている会社名、製品名は、各社の登録商標または商標です。